

# 内容言語統合型学習 (CLIL) による小中高をつなぐ授業実践 —思考を深める発問の工夫—

渡邊 聡代・山野 有紀・安納久美子・須藤美恵子

宇都宮大学教育学部教育実践紀要 第6号 別刷

2019年8月9日



# 内容言語統合型学習 (CLIL) による小中高をつなぐ授業実践<sup>†</sup>

## —思考を深める発問の工夫—

渡邊 聡代\*・山野 有紀\*\*・安納久美子\*\*\*・須藤美恵子\*\*\*\*

栃木県立宇都宮南高等学校\*, 宇都宮大学教育学部\*\*

さくら市立喜連川中学校\*\*\*, 足利市立葉鹿小学校\*\*\*\*

An innovative educational approach, "Content and Language Integrated Learning (CLIL)" was applied to contexts of English education in public elementary, junior high, and senior high schools in Tochigi, Japan, in order to maintain coherency of those respective schools. In their practice classes, cognitive domain was focused, and the necessity of promoting questioning considering revised Bloom's taxonomy is recognized. It is testified that CLIL contributes to coherent English education through elementary, junior high, and senior high schools, and that it corresponds to new course of study from Ministry of Education, Culture, Sports, Science and Technology of Japan.

キーワード：内容言語統合型学習，ブルームの思考の分類〔修正版〕

### 1. はじめに

日本の初等中等教育における英語の授業は、将来社会で生かせる英語力の養成を目指している。新学習指導要領においても「コミュニケーション能力の育成」という1本の柱に沿った外国語教育が求められている。しかし、小学校・中学校・高等学校（以下、小中高）の連続性を意識した授業の実現には課題が多い。そこで、本研究4名は、和泉（2016）も第2言語習得理論から効果的としている、「内容言語統合型学習（CLIL）」の小中高の円滑な接続に資する運用を試みた。内地留学中の小中高それぞれの教員が研究授業を行う際、指導案の作成はCLILを基に協同で行い、一貫性のある英語教育の在り方

を模索した。

池田（2016）、山野（2013）によればCLILでは、学習動機を高める本物の内容を、学習する言語を活用して学ぶ。加えてさまざまな思考活動と協学、異文化理解を取り入れ、学習者の体験的学習を促す。「4つのC」と呼ばれるContent（内容）、Communication（言語）、Cognition（思考）、Community/Culture（協学/異文化理解）のフレームワークにより、高品質な授業の実現を保障する。

また、池田（2011）は、CLILにおける「ブルームの思考の分類〔修正版〕」の活用が、「思考力を伸ばすためのバラエティーに富みバランスの取れた教育活動を設計し実践すること」に寄与すると述べている。この点に着目し、日本の公立の学校で検定教科書の「内容」を、言語は「英語で」教えるにあたり、「4つのC」の中でも特に、「Cognition（思考）」を研究し、共有することによって、小中高をつなぐ授業が実現できると考えた。具体的には授業の中に『分析』『評価』『創造』など高次思考力を要する状況をつくり、思考を促す発問を工夫した。

<sup>†</sup> Akiyo WATANABE\*, Yuki YAMANO\*\*, Kumiko ANNO\*\*\* and Mieko SUTO\*\*\*\*: CLIL Practice Seeking Coherency Through Elementary, Junior High, and High School: Promoting Questioning for Deeper Thinking  
Keywords: Content and Language Integrated Learning (CLIL), Revised Bloom's Taxonomy

\* Utsunomiya Minami High School

\*\* School of Education, Utsunomiya University

\*\*\* Kitsuregawa Junior High School

\*\*\*\* Hajika Elementary School

（連絡先：watanabe-a02@tochigi-edu.ed.jp）

### 2. 栃木県の公立学校における実践

#### (1) 足利市立葉鹿小学校での実践

平成30年7月10日（火）、足利市立葉鹿小学校5

年1組にて、文科省教材 We Can!①(東京書籍)より、Unit 4 What time do you get up? の単元を扱う研究授業を須藤美恵子教諭が行った。本教材では、"What time do you get up?" という問いを題材に、日本の小学生の典型的な日課が時刻と共に示されている。授業の目標は「世界の子どもたちの生活の様子を知り、自分たちの生活について振り返る」とした。思考を促す発問を小学校段階の英語で入れるために、二つの活動を工夫した。

まず一つ目の活動では、オーセンティックな教材として、事前に授業者が直接本人から取材し、地域で実際に働いている警察官、消防士やお菓子屋さんの日課を用意した。そしてそれらを紹介した上で、What time do you get up? や What time do you go to school? と児童に対して発問することにより、ただ単に自分の日課を述べるのではなく、児童に自分の生活と地域の人々の生活とを『比較』させた。児童は自分の日課を "I get up at seven." と声に出して言ったり、授業者が "I get up at six?" と言ったところで挙手したりすることによって表現した。その後、外国の子どもたちの生活の様子ということで特にインドとケニアの女の子の日課を紹介し、再び児童に自分たちの生活と『比較』させた。児童は「学校からの下校が早くていいな」「早く起きてたくさん手伝いをするのだな」などと口々に話し、自分の起床時刻や学校に滞在する時間、帰宅時刻、家事に従事する時間などと『比較』し、自分たちの日課が外国の子どもたちと類似点もあるが相違点もあるということに気付くことができた。

二つ目の活動としてその後、エチオピアの13歳の少女、アイシャの生活について扱った。児童たちに、4人ずつグループになるよう指示し、それぞれのグループに 'eat breakfast' や、'go to school' など、教科書に出てきた表現がイラストと共に提示してあるカードを配布した。そして、アイシャの日課を「やっているだろうこと」と「やっていないだろうこと」に『分類』させた。その上で「13歳のアイシャの一日～水を得るために～(日本ユニセフ協会)」のビデオを視聴させた。視聴前に予測させたことによって、児童たちは推測しながら主体的にビデオを観ることができた。児童たちの予測に反し、アイシャは1日1度しかご飯を食べられず、学校へも行けず、お風呂に入らず、一日8時間もの時間を水汲みに費やしていることをビデオ視聴後に確認した。そして

そこで "If you are Aysha, what do you want to do?" と既習の表現を使ってアイシャのやりたいことを『想像』させた。すべてのグループが 'go to school' 'take bath' 'eat breakfast' とカードを使って表現し、また「きれいな水を飲みたい」「不自由なく過ごしたい」「おいしい食べ物が食べたい」「暖かいベッドで寝たい」など日本語で思いを書き出していた。そこに「世界の児童就労」に関するデータや世界の子どもたちのおよそ6分の1が学校へ行けない事実を示した。児童は、想像していた以上に多くの世界の子どもたちが働かざるを得ず、学校に行けない状況であることに驚いた様子であった。

授業は、授業者から児童に "I have a last question. What time do you go to school?" と尋ねることで締めくくった。心の変容があった終末、児童が「学校に通うことは当たり前ではなく幸せなこと」であることを実感しながら "I go to school at ~." と答えて欲しいという授業者の願いを込めての発問が、その意味を伝えた授業であった。

## (2) さくら市立喜連川中学校での実践

平成30年7月3日(火)、さくら市立喜連川中学校3年2組にて、検定教科書 NEW CROWN English Series 3 (三省堂) より、Lesson 4 The Story of Sadako Get Part 2 の単元を扱う研究授業が安納久美子教諭により行われた。教科書には、広島の平和資料館を見学した生徒がショックを受け、先生から "It's important for us to see the reality of war." と教えられる一連のやり取りに加え、原子爆弾や8時15分で止まった時計の写真も掲載されている。授業の目標は、「戦争や平和について理解し、考えを伝えることができる」とし、言語については 'It is ~ for ~ to ~' の表現を導入することとした。ここでは特に授業の始まりから思考の活性化へとつながっていく部分と、授業の後半で行ったアウトプットを導き出す活動を紹介する。

まず、授業の始まりで、内容に自己関連性を持たせ、生徒の発話から広島の原子爆弾の話題へと導くために、発問に対する生徒の答えの予測をして授業計画を立てた。始業のあいさつで、"How are you?" と尋ねた時に、"I'm sleepy." と答える生徒がいることが予測できたので、そこから全員に対して "What time did you go to bed last night?" と尋ね、遅くまで起きていた理由として、スマホを使っていたと答

える生徒に, "Have you ever played any smartphone games?" と問いかけ, 次の活動に向けて, 生徒の背景知識を活性化させることにした。そして実際に授業で, 自己関連性のあるオーセンティックな素材として, 日常生活で生徒たちが多くの時間を費やしているモバイルゲームを使い, 生徒の一人が操作するゲームの様子を教室のテレビ画面に映し出すと, 生徒たちは大変盛り上がり上がっていた。ゲームの後で, 8時15分を指した時計のイラストを見せ, "What time is it?" と問うと, "It's eight fifteen." と生徒たちは元氣よく答えていた。"Then what does this time mean? What happened at 8:15?" と尋ね, 『想像』させると, 生徒たちから「原爆だ」という意見が複数出た。"That's right. An atomic bomb was dropped over Hiroshima." と授業者が言いながら, きのこ雲の写真を示した。新出の'an atomic bomb' という単語は, 生徒は文脈と写真で理解することが出来ていた。次に, 原子爆弾の広島投下時のきのこ雲の写真と, ゲーム上での爆弾投下の画面を同時に映し, "What is the same? What is different?" と問いかけ, 2分程度ペアで『比較』し, 共通点と相違点について考えさせた。生徒からは「両方とも爆弾」「原爆は現実だけど, ゲームはただのゲーム」「原爆は人が死ぬ」などの意見が出た。そこで "Many people were killed by the atomic bomb." と言いながら『市民が描いた原爆の絵』を見せた。さらに "How many people died of the atomic bomb?" と問いかけた。14万人という数字を知り, 生徒は驚いた様子だった。次に被爆前の原爆ドームの再現図を見せ "What is this?" と問いかけると, 数名の生徒から「原爆ドーム」という声が聞かれた。破壊される前と破壊された後の原爆ドームの写真を, 生徒たちは熱心に眺めていた

その後, 平和の維持のためには It is important for us to learn history. と, 本時の表現を導入しつつ, 歴史を学ぶことは大切だということを確認し, グループ活動で紛争の原因は何であるか, カードを使って考える活動をした。カードには Culture, Race, Tree, Food, Water, Religion, Diamond, Smart Phone, Oil Heater, Global Warming, Car などの語句が1つずつイラストと共に記されている。生徒たちはガードを順に, 紛争の原因になるかならないかをグループで『分類』していった。そして活動後, 実はすべてが紛争の要因であることを知り, 大変驚

いていた。さらに授業者はシリア難民でドイツへ逃げて来た少女マラクさんや, 同じくシリア難民でトルコの砂浜で遺体となって見つかった3歳の少年アイルン君を, 写真を使って生徒たちに紹介した。"How old was he? Can you guess?" と生徒たちに問いかけたところ, "Five years old." "Three years old." という答えが返ってきた。"He was only three years old." と伝えると, 生徒たちはしんと静まり返った。こうして十分な内容理解をしてから, 戦争と平和について考え, 'It is ~ for ~ to ~' の言語との統合もねらって, 英文を書かせた。生徒たちに "How can we stop the war? What can we do? What's important?" と問うたところ, "It is important for us to solve our problems by talking not fighting." "It is important for us to respect others." "It is important for us to study about world." "It is important for us to make rules for peace." など, 優れた提案を生徒たちから引き出すことができた。

生徒たちが授業の最後まで集中力を途切れさせることなく, ゲームという身近な話題から世界の平和を考える授業が実現できた。また, 思考を促す発問を随所にちりばめることによって, 最終的に生徒たちの思いが表現できる授業にすることができた。

### (3) 栃木県立宇都宮南高等学校での実践

平成30年7月17日(火), 栃木県立宇都宮南高等学校1年1組にて, 検定教科書 Vivid English Communication I (第一学習社) より, Lesson 6 Take a Chance on Youの単元を扱う研究授業が渡邊聡代教諭により行われた。教科書に載っている内容は, シンガーソングライターのアンジェラ・アキさんのこれまでの人生についてと, 歌「手紙～拝啓十五の君へ～」が作られた経緯についてである。歌は, 生徒たちがちょうど15・16歳なので, 自分たちへのメッセージとして受け取ることのできる楽曲である。また, 困難を乗り越え, 夢を追いかけるアンジェラ・アキさんについての話題は, 生徒にとっては興味深いものであると思われる。授業の目標は, 内容については「アンジェラ・アキさんの歌のメッセージや人生について興味を持ち, 自分の人生について主体的に考え, 表現する」こととし, 言語については「"It wasn't easy for her to realize her dream." の表現に慣れ親しみながら, 積極的に4技能を活用する」こととした。小中高, 共通のテーマとして扱

うことにしていた「時間」については、具体的な時刻に関するものは内容として無かったが、大きく「人生」や「年齢」も「時間」に関わるものとしてとらえた。

授業では初め、生徒が自分たちと授業者の年齢を確認した後、4人のグループで協力しながら、アンジェラ・アキさんの人生について教科書に載っている情報を確認した。スライドで写真や地図などの視覚資料と共に"When was she born? Where was she born? Why was she left out? Where are her high schools? Where is her university? Who changed her? Was it easy for her to realize her dream?"という質問を順に提示し、ホワイトボードを使ってグループごとに解答を書かせ、クラスで共有した。

その後、アンジェラ・アキさんがこの歌にのせて様々な職業の人々の挑戦を紹介している2014年の動画を視聴した。そして授業者、卒業生、シリア難民の男の子の人生について、授業者の説明を聞いた。前述の葉鹿小学校の授業で紹介された消防士の方が宇都宮南高校の卒業生だったため、葉鹿小学校で使った写真をそのまま使って紹介した。また、シリア難民の少年アイラン君についても、前述の喜連川中学校の授業で使用したのと同じ写真を使用した。その後、自分の人生について、これまでの振り返りとこれからの展望についてワークシートに書かせた。授業計画ではクラスで自分の人生設計についてシェアすることも視野に入れていたが、授業の時間が足りなかったため、ワークシートを完成させることを宿題として、この授業は終わった。後日提出されたワークシートには、"It wasn't easy for me to continue baseball. Baseball is group sport. If I miss (= make a mistakeの意味で使ったと思われる), team is lose. So I didn't continue baseball. I will enter a first-class college and enter a graduate college. Finally, I want to be a physics researcher." や、"It wasn't easy for me to have confidence. I don't have confidence every time and so I'm practicing basketball hard and studying hard. I want to be a PE teacher. I will make an effort to be a PE teacher. For example, study hard, practice basketball and never give up." などと書かれており、英語の誤りは散見されるが、生徒がそれぞれ努力して英文を書いてきたことが伝わってくるものとなっていた。また、生徒がこれまでの人生について

『価値判断』し、アンジェラ・アキさんの歌やTake a Chance on Youというメッセージの意味を考え、これからの自分の人生について主体的に考え表現するという、『創造』の活動を、思考力を働かせて行ったことが分かるものとなっていた。

### 3. 成果と課題

以上の3つの研究授業によりCLILが新学習指導要領の理念と、小中高の一貫性のある英語教育の実現に資するものであるということが分かった。CLILによる豊かな文脈が必然性のある発問を可能にし、高次思考力を要するやりとりを促す。それを発達段階に応じて授業で実践することによって、一貫したコミュニケーション能力の育成ができる。

しかし、授業で実践するためには授業者の「ブルームの思考の分類〔修正版〕」についての理解と運用力が欠かせない。そこで、思考の分類ごとの発問を表にまとめ、授業計画で援用できるようにした。この表は授業者3名の、平成30年度内地留学研究成果報告書に掲載されている。また、今後さらに精査の上、発表予定である。

\*本研究は科研基盤研究C(17K02881)「小中高英語教育連携によるCLILカリキュラムおよび研修プログラムの開発」の助成を受けている。

### 参考文献

- 1) 和泉伸一(2016)『フォーカス・オン・フォームとCLILの英語授業』アルク
- 2) 池田真・渡部良典・和泉伸一(共編)(2016)『CLIL(内容言語統合型学習)上智大学外国語教育の新たな挑戦 第3巻 授業と教材』上智大学出版
- 3) 山野有紀(2013)「小学校外国語活動における内容言語統合型学習(CLIL)の実践と可能性」『EIKEN BULLETIN 25号』日本英語検定協会, pp. 94 - 126
- 4) 渡部良典・池田真・和泉伸一(共著)(2011)『CLIL(内容言語統合型学習)上智大学外国語教育の新たな挑戦第1巻 原理と方法』上智大学出版

平成31年3月27日 受理



**CLIL Practice Seeking Coherency Through Elementary,  
Junior High, and High School  
: Promoting Questioning for Deeper Thinking**

**Akiyo WATANABE, Yuki YAMANO, Kumiko ANNO, Mieko SUTO**